

歯科から診る摂食嚥下障害へのアプローチ

寺本浩平

医学の進歩で救命率は上がったが、要介護高齢者は年々増加している。歯科界では、歯科治療さえ施せば食事ができることが“大前提”だったが、要介護高齢者においてはその前提が崩れた。そのため、治療後の嚥下機能評価への責務が問われるようになった。さらに歯科訪問診療の現場では、その崩壊した口腔内に唾然とする症例にしばしば遭遇する。本日は、訪問歯科の現状および摂食嚥下障害への歯科的アプローチについて言及したい。

口腔リハビリテーションとしての歯科技工

早川浩生

健常な状態と要介護状態(日常生活でサポートが必要な状態)の中間の状態として、2014年に日本老年医学会が、高齢者が筋力や活動が低下している状態(虚弱)を「フレイル(Frailty)」と呼ぶことを提唱した。多くの高齢者は健常な状態から、フレイルの時期を経て要介護状態に至る。口腔領域では日本歯科医師会が中心となり、現在オーラルフレイル対策が進行しつつある。

疾病やオーラルフレイルを予防・抑制することと歯科医療・歯科技工との関係等、口腔顎顔面リハビリテーションや歯科医療を根底から支える歯科技工士の重要性はより一層高まっている。大学医学部の附属病院の歯科技工室から見た多様な歯科技工の一部を紹介したい。

ポイント

1. 口腔外科関連の歯科技工
2. 顎顔面補綴の歯科技工
3. 予防歯科に関する事
4. 口腔リハビリテーションとしての歯科技工